

2018. 10. 30 (火)

2つのループに生きる

石田 淳

はじめに

私は今年の4月から社会学部に赴任してきました。とはいえ関学の社会学部・社会学研究科には実は割と長くいます。1999年にこちらの大学院にやってきて——赴任のときに給料を決めるために、なぜか手書きで履歴書を書かされて、書いているときに気付いたのですが——大学院に入った年がアカデミックキャリアのスタートだとすると、今18年目ですが、18年のうち12年間は、何らかの形で関学にいたこととなります。

2012年の3月まで、最終的には任期制教員という形でこちらに在籍して、その後は大阪にある大阪経済大学に赴任しました。その後また縁があってこちらに戻ってきました。

最初にこの場で告白をしなければならぬのは、実はそれだけ関学に長くいてチャペルに出るのは今日が初めてなので、誠に申し訳ない気持ちです。そういう意味で不信心な人間でしたが、チャペルがあることは、ずっと何らかの形で気に留めるといふか、どこか重しのような形であったと思います。ですので、今回こういう形で話す機会を頂いたのは非常にうれしいことだと思います。

せっかく初回でもありますので、久しぶり

に関学に戻ってきてどういうことを感じたのかを話すことができたらと思っています。

そういう意味では、元々勉強した母校に戻ってくるというキャリアですが、そういう人はたぶんそれほど珍しいことではなく、関学の中でも、少なくない人が戻ってきてここで教員になるというキャリアを描いています。もちろん他の大学でもそういう人はいると思いますので、私の話はそれほど特殊な話ではないと思いますが、いろいろな平凡なサンプルをたくさん集めて真の知りたいことにたどり着くというのが、統計の教えでもありますので、1つのサンプルとして話ができればいかなと思います。

BIG PAPA で雷に打たれる

話は4月に戻ります。慌ただしく引っ越しなどをして、新学期が始まってバタバタして、4月半ばか5月ぐらいだったと思います。私はPAPA派なので、よくPAPAでお昼を食べるのですが、いつものようにお昼ご飯を食べていたときに、まさに雷(いかずち)に打たれたかのように、天啓という言葉をここで使うと差し障りがあるかもしれませんが、ビビビッと「何で俺はここで飯を食べているのだ？」という気になったのです。ご

くごく普通に食べていたのですが、「何で今、PAPA で飯を食っているの?」と、びっくりしたのです。

それはどういうことかという、何か全然、変わっていないのです。でも自分の大学院時代の仲間はみんななくなりましたし、自分一人で食べているという、何かすごく特殊な感慨を覚えました。そういうこともあって少し思ったのは、これはループものの主人公のようにないかということです。

まわりがループする世界で生きる

ループものというのは、皆さんご存じですか。世界が何らかの理由でループする、そういう物語形態の一つです。

例えば、一番私の好きなループものとして、『Groundhog Day』というアメリカの映画があります。日本語のタイトルは『恋はデジャ・ブ』という、すごくかっこ悪いタイトルですけど、すごくいい映画なので、ぜひ見てください。

どういう映画かという、ビル・マーレイ (Bill Murray) が主人公ですが、地方ローカルテレビのアンカーで、最初はすごく自己中心的で嫌な人間なのです。確かピッツバーグだったと思いますが、近郊の田舎町で、グラウンドホッグデーというのが1月か2月ぐらいいあって、春の訪れを、グラウンドホッグというリスか大きなネズミのようなものを起こして聞く。ただそれだけなのですが、よく地方ローカルニュースでやっている季節の風物詩のものだと思ってください。それを取材しに行くのですが、何らかの理由でビル・マーレイはその日を永遠に繰り返すようになります。

最初は戸惑って、いろいろと抜け出そうとしますが、そのうち彼は、永遠に同じことが繰り返されること、つまり、周りの人は覚えていなくて自分だけが覚えていることを利用して、自己利益のためにいろいろなことをしようとします。

例えば、次の日には元に戻っていることを利用して、たくさん食べたり、何かいたずらをしたり、銀行強盗をしたり、あるいはゲーム感覚で女性をハントしたりします。しかし、そのうち、むなしさに気付いていきます。

どうやって彼がグループを抜け出すかは、ぜひ映画を見てほしいと思いますが、何かそのような感じがするわけです。つまり自分は直線的な時間を動いているけれども、周りはぐるぐる回って、あまり変わっていない。

そういうことを感じさせるのは、一つには、私が昔からいて、昔から知っている顔が今もあり、少しずつ年は取っているけれども、変わっていない。あるいは関学というキャンパスが、まさに歴史的に普遍であることを是とするようなキャンパスで、そういう舞台装置が、そう感じさせるのかもしれない。

さらに考えると、大学で働くこと自体が一種のループもののような感じがします。どういうことかという、大体の人は18歳ぐらいで入ってきて22歳ぐらいで出ていく。それが、言ってみれば毎年繰り返されるわけです。そうすると、ずっとそこにとどまっている者からしたら、周りがぐるぐる回っているように感じる。

ビル・マーレイのように、「あのループでは失敗したから、次はもう少しこうやろう」と、少しずつ適応していくわけです。ですか

ら、大学という環境や大学教員という仕事自体がそう感じさせるのかもしれませんが、あるいは私にとっての関学という環境が、さらにそう感じさせるのかもしれませんが。

自分だけがループしてる世界で生きる

一方で、逆にこうも考えるわけです。普通のループものは、主人公はループであるということ意識しながら、周りがぐるぐる回っていく。つまり主人公の時間は単線のだけでも、周りは繰り返される。そこに順応していくというのが、ある種のゲームをやっているような面白さがあるわけです。スーパーマリオのように、最初はいきなりクリボーにぶつかって死ぬけれども、次はよけられるように、少しずつ進むという楽しさがあります。

でも逆にも考えられるわけです。つまり実はくるくる回っているのは主人公である自分で、周りは進んでいるのかもしれない。

もしかしたら学生のみなさんの目から見たら、そう見えるのかもしれませんがね。つまり大学に居続ける人は、くるくる回っていて、久しぶりに帰ってきたら、「まだ回っているなあ」と、それがいいのかわかりませんが、そのようにも感じるわけです。

また映画の話になって恐縮ですが、一つ思い出す映画として『50回目のファースト・キス』という映画があります。原題は『50 First Dates』だったと思いますが、10年ぐらい前の映画です。ドリュー・バリモア

(Drew Barrymore) とアダム・サンドラー (Adam Sandler) が出ていました。去年ぐらいに日本人でリメイクされて上映されています。

それはどういう話かというと、ドリュー・バリモアが主人公なのですが、彼女だけがループしているのです。彼女は父親の誕生日に事故に遭って短期記憶に障害が残り、1日たつと記憶がリセットされるのです。だから家族や周りの人は、なるべく刺激しないように、父親の誕生日を毎日繰り返します。彼女は朝のルーティンでダイナーにご飯を食べに行き、帰ってきてから絵を描きますが、夜は父親の誕生日を祝うということを毎日繰り返します。つまり主人公はぐるぐるしているけれども、周りは進んでいる。

その映画がうまいのは、舞台がハワイで季節感があまりないので、同じ日を繰り返すのもそれなりにリアリティがあるのです。

だから、そういう映画を思い出して、もしかして回っているのは自分かもしれないと感じたりもします。

私はたぶん今後も、何事もなければ関学のキャンパスの中できるくる回り続けていると思います。ですので、もし皆さんが大学を出られて久しぶりに戻ってきたときに、「ああ、いつまでも回っているな」と見ていただければ、これは私にとって何よりの喜びではないかなと思います。

(社会学部教授)